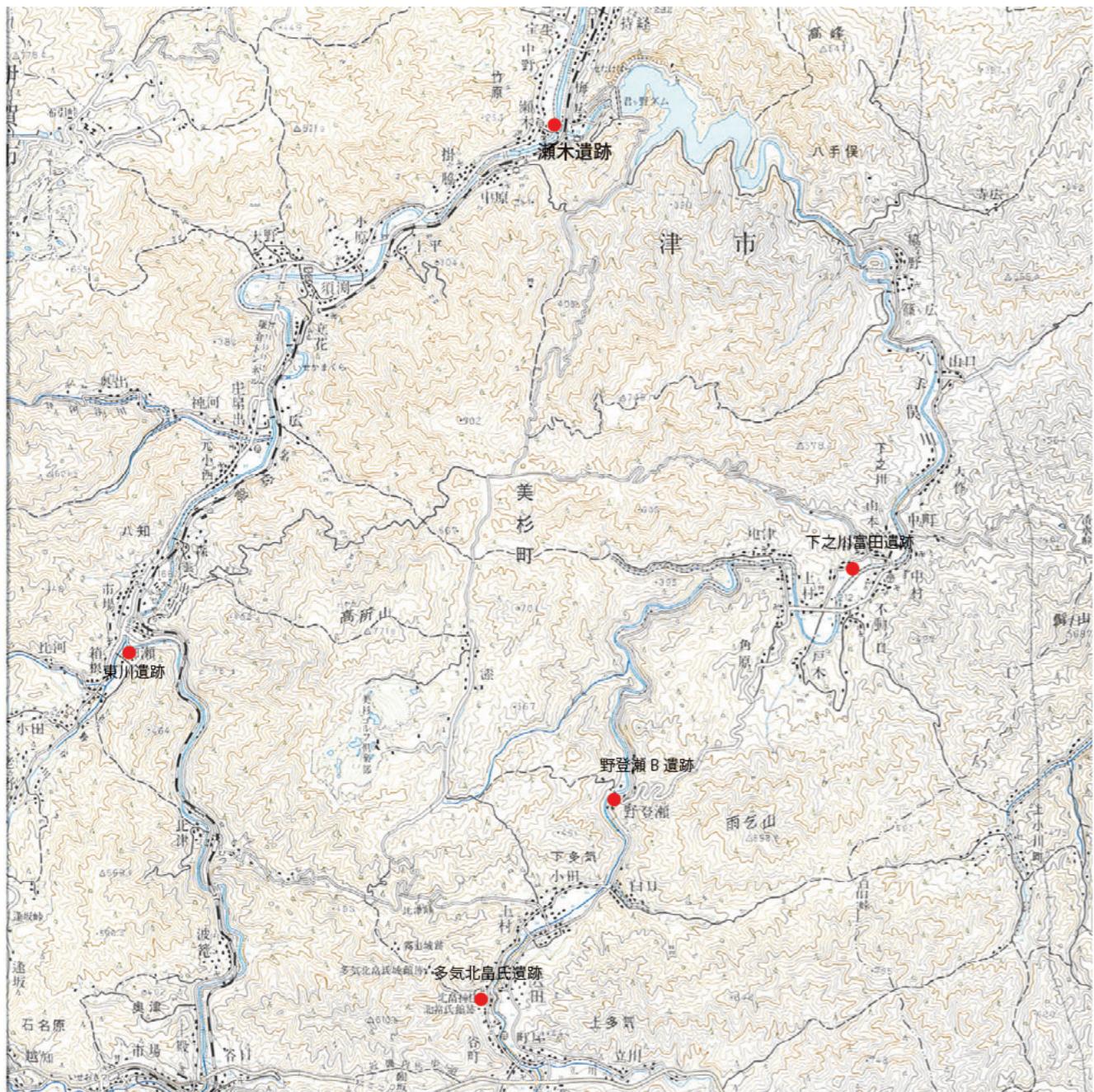


瀬木遺跡（第2次）現地説明会資料

~津市美杉町竹原瀬木~

2011年9月10日
三重県埋蔵文化財センター



瀬木遺跡周辺の主要遺跡 (国土地理院 1:50,000『二本木』より、1:60,000)

【おわりに】

室町時代は、伊勢国司・戦国大名である北畠氏が、八手保川上流の多気に本拠を置き繁栄した時代でもあります。その時代の遺構・遺物が多く見られるこの竹原の地も、北畠氏と何らかの関係や影響があるかもしれません。雲出川と八手保川の合流地点であり、幾度の氾濫もあったであろう中、雲出川の利を受けたこの竹原の地が古来より人々の生活の地であったこと、またその長い歴史を、この遺跡は語ってくれていると思います。

調査遺跡名	瀬木遺跡
所 在 地	三重県津市美杉町竹原
原因事業名	平成23年度(主)久居美杉線地域活力基盤創造交付金(道路)事業
調査実施機関	三重県埋蔵文化財センター



調査（遺構掘削）風景

【はじめに】

瀬木遺跡は、雲出川本流と八手保川の合流地点にある遺跡です。この地は雲出川流域の長年にわたる浸食と堆積作用によって、南北に長い谷底平野と所々に小河岸段丘が形成されてきました。東西約170 m、南北約850 mと広範囲にわたって河岸段丘上に瀬木遺跡は立地しています。

旧一志郡内には伊勢本街道、初瀬街道といった畿内と南伊勢や東国を結ぶ主要な街道が存在していましたが、これらの主要街道以外に、名張・青山方面から伊勢方面に至るルートとして、伊賀市青山町高尾から桜峠を越えて雲出川沿いに竹原地区を通るルートも平安時代頃までにひらけていました。つまり竹原地区は伊賀国経由で伊勢国と大和国を結ぶルート上に位置しています。

今回の発掘調査は、県道の建設事業に伴って実施した2次調査になります。1次調査では、縄文土器や鎌倉・室町時代の集落跡、土器が出土し、鍛冶遺構も見られました。今回の調査の結果でも、さらにその広がりが見られます。

それでは、調査によって見つかった内容を見ていきましょう。

【縄文土器】

今回の調査でも、縄文時代後期（今から3,500年前）の土器片が見つかりました。縄文時代の土器は、雲出川沿いの八知や、八手保川沿いの下多氣でも見つかっており、この時代の人々は、この美杉の地を広く活動の場としていたと考えられます。

【鎌倉時代の山茶碗】

ほぼ完形に近い形で出土したものが、11世紀～12世紀の山茶碗です。山茶碗は知多半島や渥美半島で作られたとても堅い陶器で、この時代の人々は、伊勢方面と頻繁に交流していたということが言えます。

この山茶碗が多く出土する場所は、この竹原の地がおよその西限で、ここよりさらに西方では、近畿圏の影響をうける瓦器・黒色土器の比率が山茶碗の比率より高くなります。つまり、伊勢方面と近畿の両方の影響を受けるちょうど境に当たる地でもあると言えます。

【室町時代の炉跡】

今回の調査で見つかった最も特徴的な遺構は、室町時代の炉跡があります。1次調査の結果から、ここでは鍛冶作業が行われていたと考えられていました。今回も鍛冶作業につながる遺物（鉄滓）が出土しましたが、それに加えて、多くの石組みが見つかりました。擂鉢状に組まれた石組みと、その中に焼け土があること、また熱で劣化した石の存在や周囲には多く炭が混ざっていることなど、まさにここで鍛冶作業が営まれていたということが見てとれます。



炉跡石組み



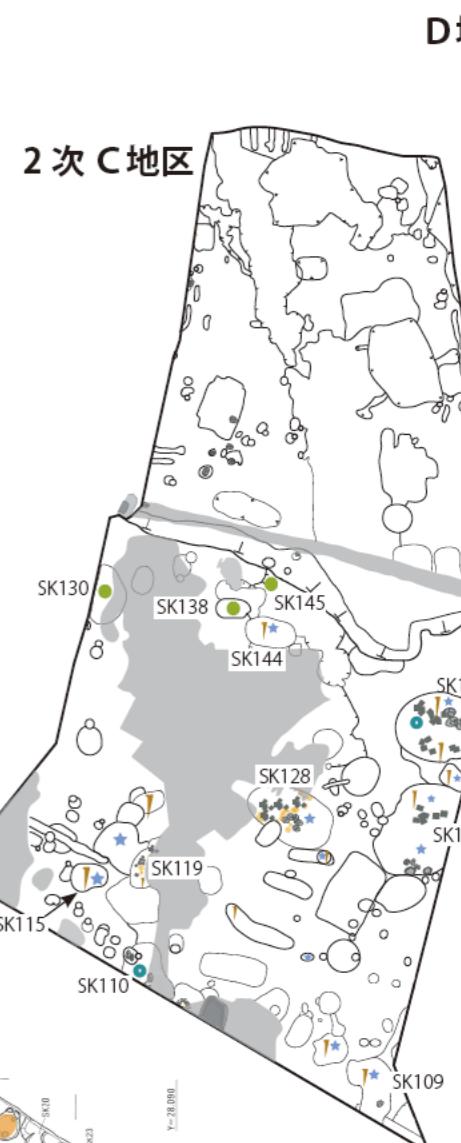
縄文土器



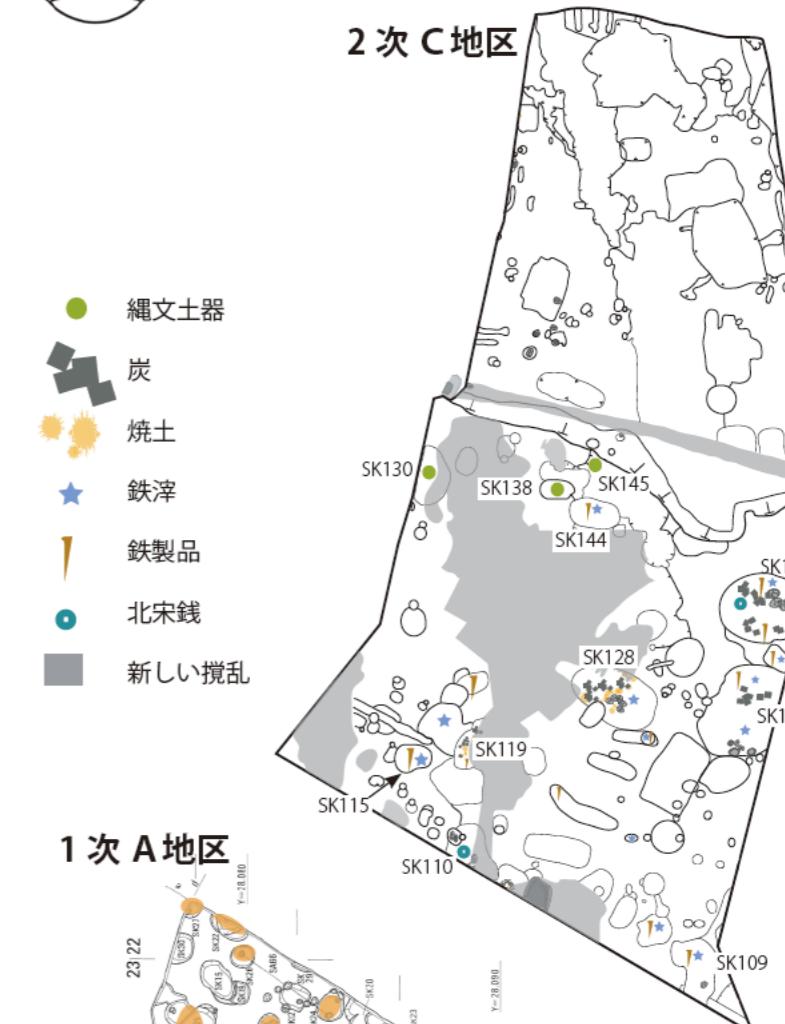
D地区 陶器皿出土状況



土坑出土鍛冶関連遺物 鉄滓・刀子・釘・火打金?・鉄滓・北宋銭・炭



1次 A地区



遺構平面略図 (1:300)

【室町時代の出土品】

多くの土師器や陶器のほか金属製品も出土しました。土師器は南伊勢地域で作られたものが多く見られます。

金属製品では、鎌、刀子のほか、釘や鉄滓（鉄を溶かした時に出るカス）、また貨幣（北宋銭「咸平元寶」「元祐通寶」など）もあります。前述の鍛冶作業と関連しているようです。